

2022年3月6日 受難節第1主日礼拝

メッセージ「この苦しみは何のため」

牛田匡牧師

聖書 ヘブライ人への手紙 2章 10-18節

先月2月24日にロシア軍によるウクライナ侵攻が始まり、10日以上が経ちました。その中で中国の北京では、パラリンピックが開催されています。パラリンピックは元々、戦争による負傷兵らの社会復帰をめざして始められたそうですが、「第三次世界大戦」になるかもしれないこのような戦争の中で、パラリンピックが行われているということは、「平和の祭典」という謳い文句が如何に無力であるか、ということを示しているようにも思います。

大国ロシアからの攻撃を受けているウクライナでは、いくつもの町が既に占拠され、首都キーウ(キエフ)も爆撃を受け多くの被害が出ているようです。もはや正確な被害者数の数字は分からないのではないかと思います。防衛態勢の強化のため18歳から60歳の男性は出国が制限され、女性や子ども、高齢者たちはすでに100万人近くが国外に避難し、難民となったと報じられています。

ヨーロッパ諸国は、ロシアからの天然ガスに依存しており、世界経済も停止できないということもあってか、NATOも欧米もウクライナを見捨てている状態です。援軍は派遣しない代わりに、アメリカやドイツは古い冷戦時代の小型銃器を支援物資として送ったそうです。送る側では倉庫の片付けができたかもしれませんが、受け取る側ではそれらが少年たちを含む市民の手に渡されていきます。それが本当の国際協力なのでしょうか。

ウクライナのラジオでは、火炎瓶の作り方が放送されているとのことですから、まるで竹槍で応戦しようとしていたどこかの国のようです。このままでは、戦争は泥沼化して、ベトナムやアフガニスタンのように、長期間にわたるゲリラ戦になってしまうのではないかと心配です。もちろん、ロシアには何千発もの核兵器がありますし、すでにウクライナ国内の原子力発電所をいくつも制圧しているわけですから、現代の世界の繁栄、私たちの日常生活というものが、実は処刑台の上で首にひもをかけられたまま、飲み食いして楽しんでいるのだという現実に、世界中が改めて目を向けさせられる事態になっています。

なぜ、こんな戦争になったのか。ロシアのプーチン大統領がおかしいのか。日本の報道ではそのように報じられることが多いですが、実際にはロシアとウクライナの関係というだけではなく、複雑な世界情勢の中で、様々な利害関係があったのでしょうか。プーチン大統領は「ウクライナを守り、解放するためだ」と言っていますが、

それは第二次世界大戦の際の日本もナチスも同様でした。そして多くの人々は、そのような大義名分を信頼して戦っていました。言い分はどちらの側にも、いくらかでもあるでしょう。だからこそ「戦争は起こしてはいけない。一旦起こしてしまうと、收拾がつかなくなってしまう」と言われていました。にもかかわらず、このような現状があります。

人は幼少期、子どもの頃に受けた心の傷によって、独善的になり、排他的になり、破壊的になる。ナチスのヒトラーも、様々な独裁者たちも皆、子どもの頃から心に大きな傷を負ってきていた。だからこそ、これからの世界に平和を作っていくためには、今「目の前にいる子どもを守る、そして自分自身の中にある子どもの心を大切にすることが必要だ」と経済学者の安富^{あゆみ}歩さんは言っています。さらにその傷は世代を超えて継承されます。例えば、直接は戦争を経験していない私たちの世代も、先の戦争からの影響をしっかりと受けていて、「祖国を守るために戦うことは大切なことで、美しいことだ」というような価値観が、社会全体に意識しないままに刷り込まれているのではないのでしょうか。ウクライナには今、世界中からの志願兵（義勇兵）が16000人も集まってきているそうですが、日本からも何人も志願者が名乗り出たということに対して、平和憲法を持つ国の中ですら、「すばらしい志だ」と評する人たちがいるとも聞きました。それもまた「剣に対して剣を取ることをよし」としてしまうような価値観です。その先にあるのは、平和ではなく破壊でしかありません。子どもたちの目に、この戦争はどのように映っているのでしょうか。子どもたちの心は、この戦争をどのように感じているのでしょうか。

ウクライナの芸術家アレクサンダー・ミロフ（Alexander Milov）の作品に「LOVE」という大きな作品があります。背中合わせで、互いにつつむき悩んでい



る大人たちの暗い姿とは対照的に、その中心には輝く子どもたちの姿があり、子どもたちはお互いに向き合って、手を取り合おうとしている作品です。芸術作品なので、解釈は自由だと思いますが、私はこの作品から、悩みの多い現代社会の中で、大人たちは互いに孤独になり、近くにいるのに顔を合わせられず、背中合わせで、それぞれに苦悩している。けれども実はその中では、子どもたちはもっと素直に、もっと素朴に互いに手を取り合いたいと願っている様子を感じました。命を奪い合う戦争は一刻も早く止めなければなりません。子どもたち、命はそれ自身で互いに伸びていこうとするものです。大人たちはその根源的な事実、子どもたちにごそ目を注がなければならないのではないのでしょうか。

さて、今回の聖書の箇所は一回読んでも、何を言っているのかよく分からないような難しい箇所でした。この手紙が書かれたのは、イエス様が十字架で殺されて、三日目に引き起こされてから数十年後、最初期の弟子たちの次の世代の頃ではないかと考えられているようですが、「あのイエス様の受難、十字架による処刑は、何のための苦しみだったのか」ということがテーマとなっています。この聖書の翻訳も、とても分かりにくいのですが、10 節では「イエス様は十字架という苦しみを通して完全にされた。それは万物の源である神にとってふさわしいことであった」と正当性が述べられています。11 節以降は、イエス様は私たちと同じ生身の身体を持った人間であり、その意味で私たちと本当に「きょうだい」でした、ということです。

16 節の「助ける」という言葉は、脚注に「直訳は『引き受ける』』とあるように、単純に「受ける」と訳す方が分かりやすいと思われそうですが、要するに「イエス様は天使から受けた、生まれたのではなく、アブラハムの子孫として、生身の肉体を受けて、私たちと同じ人間として生まれました」ということです。それ故に「人々の罪について神を宥めることができた」(17) のであり、さらに「ご自身、試練を受けて苦しまれたからこそ、試練を受けている人たちを助けることがおできにな」(18) ったのでした。

私が保育園で子どもたちに聖書のお話をしている、「イエス様はとっても優しくかったんだけど、悪い人たちに捕まえられて、十字架にかけられたんだね」という話をすると、子どもたちはいつでも「何で?」「優しくて、悪いことしてないのにどうして?」と聞いてくれます。実際には時の権力者たちとの衝突があり、当時の常識、社会構造から見ると、イエス様はいわゆる型にはまらない「反乱分子」だったので排除された、ということでしょうが、子どもたちの感性は素直です。そして、そのように「イエス様の十字架という受難、この苦しみは何のためなのか」ということは、イエス様と一緒に行動していた弟子たちにとっても、大きな疑問であり課題でした。

イエス様の十字架上での死と、その後の復活、死からの引き起こしを体験した弟子たちは、その受難の意味を後から改めて考えました。イエス様は神の子、万物の創り主であり源である方として、死ななくても良かったのに、なぜ死ぬ必要があったのか。そもそも生身の人間として、それこそわざわざ飼葉桶の中に生まれる必要もなかったのに、なぜ生まれたのか……。それらについての問いと答えは、弟子たちから弟子たちへと伝えられ、やがてそれぞれの手紙などへと書かれていき、それがこの聖書になりました。この「ヘブライ人への手紙」では、それは今回の 17 節 18 節の言葉「イエス様はあらゆる点できょうだいたちと同じようになられたからこそ、ご自身も試練を受けられて苦しまれたからこそ、試練を受けている人たちを助けることができるのです」として理解されています。

私たちの日々の生活の中には、様々な苦しみがあります。今日で言えば、新型コロナウイルス感染症があり、経路不明の感染や容体の急変があり、予期せぬ突然の別れもあります。その他にも、事故や病気、障がいなどもありますし、また仕事を失い、衣食住を失う貧困があり、差別もあります。さらに戦争があり、人の手によって他者の命が傷つけられ奪われています。思わず「この苦しみは何のためなのか」と叫びたくなることも多くあります。そして多くの場合、答えはすぐには出ないでしょう。むしろすぐに出る答えは、唯一の正解なのではなく、答えは時と共に変化していくものなのかもしれません。

イエス様自身、十字架の上で「わが神、わが神、なぜ私をお見捨てになったのですか」(マルコ 15:34)という絶望の叫びをあげました。「命の神への揺るぎない信仰があれば、絶望することはなく、苦しみの意味や目的も分かって悩むことがない」などということはありません。時に悩み、絶望することもあります。ヘブライ語聖書の「詩編」には、悩みや嘆きの詩歌がたくさん収められています。その上で聖書全体を通して、私たちに告げられていることは、命は絶望には終わらないこと。肉体の死を超える絶対の命、永遠の命があるということ。今は悩み苦しんでも、その意味や目的はいつか必ず見出していくことができる、ということなのではないかと思えます。なぜなら、ご自身も受難され、苦しまれたイエス・キリストがいつも共にいてくださっているからです。

今も世界では苦しみに叫ぶ声があり、子どもたちは泣いています。一刻も早く愚かな戦争が止むように、剣に対して剣を取るのではなく、非暴力と不服従で世界中が向き合えるように祈り求めていきましょう。また身の回りにも多くの悩みや苦しみがありますが、それらに押しつぶされてしまうことなく、仲間と共に、また神様と共に、その苦しみにもやがて意味や目的を見出していくと信じて、私たちは今週も神様によって導かれて、歩み出していきます。